

安永天明期の石東俳諧

—— 大国村俳諧を中心として ——

吉川隆美

はじめに

「安永天明期の石東地方における俳諧事情」については、昭和四十九年二月に工藤忠孝氏（故人）^{注1}が『島大国文』第三十号で発表され、また昭和五十九年には「石見銀山領の俳諧事情」を『郷土石見』第十三号で発表された。その後仁摩町教育長であった門崎清氏（故人）が、平成七年十二月に自伝風な私家版『惜花風頻』^{注2}を發表された。筆者は今回はからずも、その工藤忠孝氏編になる『石見俳諧資料集』（一〜三巻）を入手するに及んで、筆者に関わり深い事がわかり、且つ門崎清氏の功績を公けにする意図もあつて、その門崎氏の内容を補筆して、石東特に大国・大森地方を中心とした当時の俳諧事情を定着させたいと思う。

一 江橋の大国俳壇

島根県の石東地方というには概ね、旧安濃郡、邇摩郡、邑智郡の三郡つまり江戸時代の天領を指すと考えるのが一般である。因みに那賀郡・美濃郡・鹿足郡を石西と

考えるのが自然であるが、これは浜田藩と津和野藩とを含んでいるので、果たして石西といったかどうかは定めない。

安永天明期の俳壇は、どうやらその邇摩郡の大国村と大森村を中心とする連衆と、邇摩郡の波積・大家、上村を中心として西田・福光・温泉津にも及ぶ底句舎の連衆、邑智郡の川本・築瀬の江川を中心とする連衆、それに今一つ那賀郡の跡市・有福を中心とする連衆が、各交流圏であつたようである。

その詳細はわからないが、其角↓淡々↓羅人↓羅江・風状とつながる流れだと思われる。その中心にいたのが、大国の岸本江橋であつた。その江橋が、耳順を賀して安永九年に編んだ俳諧選集『年華集』序文に

（上略）石見の大国なる岸本氏江橋子は壮年の頃

洛の羅人門に入つて誹諧を学び、統て五始・風状にも親しかりしが、近頃は粗（あらあら）古名家の深にも派（？）事、四時の風物をたゞに見すぐさず賦詠せし句、頗多かり。今春耳順の齢に満ぬるを自

(ら)も祝し、子弟親友あるは常に書通せる人々にも賀章を乞て一集正になれり。それがはじめに年の華と題す。このことを記してよと、いとも遙けき山陰の果てより尺素をおくること屢なり。吾其人を知らずといへども、既(に)道を同うすなる上、もとより四海皆兄弟也。まいて、たゞ六十余州のうちなる人の、六十の賀すなるにいかで觚(こ)を操(とる)ことをしも辞せんや。

安永九年子春正月 平安 滄浪居主人書

と滄浪居(嘯山)が記す。嘯山は京の人で三宅氏、質商で読本作家でもあるが、其角↓巴人↓宋屋と続く宋屋門であつて、羅人門ではない。江橋の幅広い人脈を語る一面であろう。五始は浪花の中島雅英で羅人門である。風状は正木氏で京の人、同じく羅人門である。

また、この『年華集』跋文は次の如く記す。

石州大國の江橋貴翁、六十の賀にもろ人より祝吟みちみちて、秀轉を並らべ万歳をうたひ給ふよし、令郎楚江子、丑の弥生に(天明元年三月カ)京へまかりて、予に跋を書よとあるにぞ辞詞たびたびに及べども、同年のちなみを以て、ひた好みに望まるに、花咲流れ御射山の同門いなみ難く。(下略)

羅江書

御射山は羅人のことで京の山口氏、羅江は中島氏で京の人羅人門である。江橋は京の羅人門で、風状・五始・羅江はいずれも同門となるのである。但し、江橋の場合

はその『年華集』中に

風雲齋先生に入門の後謁して
撫らるゝ頭に重しふじ(ぢ)の花

四十の春

我が若き氣の恥しきことしかな

とある。正木風状は別号が風雲齋であるから江橋は羅人の孫弟子になるのかもしれない。風状が宝曆頃に石東地方に力を及ぼしていたことは、工藤氏の「石見銀山領の俳諧事情」によつて知られる。その入門時期が四十歳春であつたかどうかはこれだけの資料では確定できない。また同じ『年華集』に

隠居せし時

秋をしる我身ぞ胸の月の友

と吟じ、安永六年の『除元集』(後述)には

今年仲秋の頃、安く世を通れ再び花月に遊

ぶ兒となりて、心を養ふ歳末のたのしさを

老楽や節季も筆の雪こかし

と吟じていることからして、安永六年八月に隠居したことは確定できる。安永九年『年華集』成る年が六十歳とすれば、隠居したのは五十七歳ということになり、更に前述の四十歳入門を一つの仮定とすれば、その間二十年に及んで活躍したこととなる。

因みに、工藤氏の「石見銀山領の俳諧事情」によると、風状の『除元集』中に

辰の冬、風雲齋先生の門に入て、俳名もあ

らためぬる事を

積雪にひかれて吹くや松の風 大国臨風

(後述) (宝暦十一年)

とある頃に、江橋も同じく入門したとすれば前の不確定はほど確定といってよいのかもしれない。

『石見俳諧資料集二』に所収されている、下垣内和人氏の「石見俳壇史」は、寛延四年(二七五二)羅人編『太郎百句』を、江橋が明和五年(二七六八)夏、森脇志程に借りて写本した事を末尾に記し、写した人達の名を次のような紙片に貼付したと記している。

安井積水 安井善兵衛好章 大国村之人

岸本楚江 岸本嘉兵衛統亮 右同村之人

河島猗猗 河島徳兵衛 大森町之人 銀山附役人

久利可登 久利元淑 大国村之人 医師也

岸本江橋 岸本友左エ門統張(カ) 楚江父也

また門崎清氏による『惜花風頻』には「野雲堂・不勝翁 江橋 岸本友右衛門 統張(天明八年卒)」とあり、江橋・楚江の墓と思われる墓石の写真も掲載されているから、これは門崎氏が、地元の利を活かして丹念に探索された結果のことだと確信する。そして門崎氏はその職業は麴屋^{注3}だったとする。

二 除元集

江橋の事績として『年華集』に先立つて残るものは『除元集』である。安永五年(二七七六)に除夜と元旦の句を中心とした歳旦集を編集した。このことについて彼自身は跋文に次の如く語る。

近き年頃、友垣しげく予に両節吟を集めよとありけれども、諸風士に告るも難しく、いなみて過ごせしに、去年の冬また四方より、しき波のすすめに逃る道なく、清濁坊・無待庵の両友を翹にして、集れる除元の祝章を写し、奥に時候の句を載て、行末長き葉にせんと乞ひければ、賑々しく一卷成て、めづらかにたのしき春に遊びぬ。

不勝翁 江橋

そして、この『除元集』の巻頭に

歳旦



図1. 「惜花風頻」表紙

余所になき花や日本の大旭
海は知らねど若うなる水
昆布さへ風か名残の霜置て

江橋 積水
補拙

の三句を据える。因みにこの発句は『年華集』後半部にも

遠近の好人より予が老寿を祝して、玉詠を贈り給りし芳意を謝せんと、書集て梓にもする日、云捨しこしかたの句をも書載よと、人の勧めに随ひぬれど、拙きこと草の色香なきを残すべき心もなく、書留置ざれば、おもひ出たるまを爰にしるす。

岸本 江橋

春之部

余所になき花や日本の大旭

とある。江橋の思い入れの深い句だったと言える。

江橋初の大事業である安永五年の『除元集』の序文を担当したのは積水である。これは江橋の周辺を語るに便なるものである。

天徳大に始まりて、松竹門にあらたまりぬ。情は時をもつて還り、辞は情をもつて発す。歳首を賀するに何ぞ詩歌誹諧なからんや。されば御傘のしたたりに遊ぶ末流おとしといへども、わけて船筏たる御射山の月に酔ひ、正木のかづらの花に座し、甫羅の雪を分け入て、新治の源水乏しからざるは不勝翁也。詞宗の班別は願はざれど、且暮、意を文台に湛へ、吐言四時に溢れる。藜藿の童まで戯考添削

を乞ふもの、麻のごとく竹にひとし。去年中島のわたりにさはることありて、風人岐に立ぬるを、不登の両子、筆硯をかゝげて、かの橋を指さゝれるにぞ、諸好士除元集の淵に臨んで、夜光の玉句をうかべ給ふと、拙きをわすれて耕雲亭積水いふ。

先述の『年華集』序跋を補足するに足るものであるので、一度本文に即してみる。つまり、松永貞徳の『御傘』の末流となる山口羅人の門に入り、その門人の正木風状にも入門して俳諧連歌の道に分け入り、たゞひたすらに精進した。格別人をかき分けることはなかったが、いつしか里のいやしき者まで教えを乞うようになったところが、去年の安永四年に同門の中島五始が歿するという出来事があった、事の停滞することはあったものの、幸い無待庵不(字)可^{注4}と清濁坊可登の両子の助力によって、この『除元集』編集の事業が終わったというのである。

江橋編の『除元集』は安永五年から八年までの四編があることが工藤氏の努力による『石見俳諧資料集一』で知られる。その四編の編集姿勢はほぼ同様で、先ず、歳旦の三吟を三つ並べる。既述の「余所になき花や日本の大旭」の江橋を発句として脇句が積水、第三句が補拙の三吟、次いで補拙の発句、江橋の脇句、積水の第三句の三吟、更に積水、補拙、江橋という風に、客人・亭主が入れ替っているのである。次に歳暮の発句を補拙・積水・江橋の順に並べ、次に十九吟の歌仙を置く。この「歳

		除元5	除元6	除元7	除元8	年華集	計
江 橋	野雲堂 野勝翁 野雲窩	38	35	46	25	353	497
積 水	春要齋 耕雲亭	13	38	11	13	9	84
補 拙	十界坊 二童齋	10	13	0	0	0	23
臨 風	霞觴齋	16	9	8	7	7	47
楚 江	明霞齋 万葉坊	19	8	23	23	47	120
可 登	清濁坊 自求亭 凌雲堂	18	27	37	22	54	158
春 水	楽庵	1	5	9	11	33	59
不(字)可	無待庵 仙涼齋	17	19	23	4	12	75
<帰 厚>		3	5	0	4	3	15

表1. 除元集記載の句数

且↓歳暮↓歌仙」の配置は四編とも同様である。歌仙十
九人の中には、補拙・江橋・積水は当然ながら、臨風・
可登・楚江の大国連衆の外に不可・五雲・其木・亭々・
思友・子英・浄琴・李山・山洞・竹芽・楚山・一峰・山
宜の大森連衆も加わっている。この歌仙には「臘月十六
日立春あり」の脇付があつて、補拙の「たのしさを佐保
姫も来て年忘」の発句に「好く道々に人の室咲」と江橋

が付けているところからして、安永四年十二月十六日
に補拙を客人として江橋宅で巻いた歌仙だということ
がわかる。座を構成する人物の詳細は全く不明だが、初
折表・同裏、名残折表・裏ともに「二花」「三月」の定
座を履んでいるところからして、江橋を宗匠とするき
ちんとした一座興行であつたことがわかる。そして、江
橋・積水・補拙がその座中の中心人物であつたこともわ
かる。

因みに、本集(安永五年版)「春興探題」中、「寄梅花
六親」に

父 塞翁が馬子も子たりむめの花 十界坊(補拙)
母 目をさます山へ添乳やんめの花 万葉坊(楚江)
兄 南をはなの上座や枝も兄 耕雲亭(積水)
弟 紅梅や兄を持たるはなの兄 霞觴齋(臨風)
妻 鉄漿のいろやみさほの匂ひ草 清濁坊(可登)
子 行のむめとかほるや孝の道 野雲窩(江橋)
ともあり、これ等は常に寄り合つていたと考えてもよ
からう。

今、『除元集』四巻と『年華集』とにおける、句数を
みると表1のようになる。

江橋を囲む連衆中、補拙の位置はかなり高いものと
考えられるものの、例えば安永六年まで冒頭の歳旦三
吟を吟じていたのに、安永七年以後はその補拙の代り
を江橋の息子の楚江が勤めている。恐らくこの間に歿
したものと考えられる。が、その所在は未詳である。

三 積水と春水

その歳旦につぐ歳暮の後に位置する歌仙（安永六年は十六吟、同七年は九吟、八年も九吟）の発句はいずれも積水が客人として勤めている。つまり、積水は江橋宗匠に次ぐ位置にいたと考えられる。その積水については大国村字中市の照善寺（坊）の庭前に文化八年（一一八一）十二月に建立された「文亭先生碑」によるのが最適と考えられる。それに日く、



図2. 文亭先生碑

大国村字川西の西山の麓に位置する、代々大国村の大庄屋的位置を占めた安井家当主、安井好勝の第五子と生まれ、九歳の時髪を剃して大森の石城山観世音寺の月海律師に入門したが、五年を経た時、父好勝の死後によって還俗し、父の後を継いで善兵衛を名乗った。諱好章、字子煥、文亭と号した。寛政六年（一七九四）六月廿三日六十八歳で歿した。俳諧をよくして積水と号したと記し、「唱夏月之章而絶入」と記して、その碑の左側に

我も消る中に候ふや夏の霜

と刻み込んでいる。白居易の「江楼夕望招客詩」中の「風吹古木晴天雨、月照平沙夏夜霜」を踏まえ、「夏の霜」でさわやか地上を照らしている月光の中に、自分も消えて行くというのである。天明七年（一七八七）六十歳の時隠居して子息の信夫に家督を譲り、翌八年に再び下髪して釈に帰したと刻んでいる。

これが工藤氏のいう「仰誓の『妙好人伝』初編下、十一の『石州善兵衛』と同一人物であるとも知られる」である。また子息信夫が安井好篤であり、春水であると思われる。『仁摩町誌』によると「安井好勝―好章―好敏―好謙」となっていて、好敏と好篤とが同一人であるかどうかは未確認である。碑文によると、積水には男女十四人の子供があり、その内の七人が早世、信夫は第七子である、季子美基は河島の婿になったというが、もしかしたら既述の猗猗かも知れない。この碑は息好篤が建立したもので、撰文并書は佐和華谷である。

因みに華谷は、不勝翁（江橋）六十の賀を祝して
四百四十五甲子も猶おかし花始
― 一年華集 ―
という句を贈っている。

華谷は九日市（現邑南町沢谷）の出身で、前述大森観世音寺に住んだこともあり、大森町銀山入口の元刑場跡に、その事績を刻んだ石碑がある。観世音寺は大森下市の巖の上にある真言宗の寺で、大森代官所の祈願道場であった。碑長九尺余、華谷生前の揮毫になるもので

碑文絶佳の名碑だという(大森町文化財保存会、大森開発協会編集発行「大森をたずねて」昭和三十三年十一月による)。漢学者である。大国村の名勝の一つ龍巖山の麓で亀の背に建つ碑も、華谷の撰書だという。

江橋・積水について、江橋の男楚江について語るべきだが、既述の『年華集』の跋文の「令郎楚江子」以外には、同集中に

楚江が独吟一万発句を祝して

万灯に願ひ満つるや多びす講

と父江橋が吟じた以外にその親子関係を語る資料は見当たらない。また『年華集』に

右歌仙、合二巻にして戯考しぬれば、乾の巻は可登、

坤の巻は春水掌握しぬ。

とある春水は前述「文亭先生碑」中に見える安井好篤つまり信夫だと考えられ、後述『楽書集』中の

(文化十五年)文月二十二日より同二十八

日迄本郷(波積村)福城寺に供養有献灯奉

納、大国春水評有之

てふてふに見せたきものよ帰り花

念仏の峰より高し富士詣

以外にこれもまた、考証のための資料不足である。ともあれ、この江橋父子、積水父子の座右に位置していたのは可登だと思われる。(表1に見える如く春水が『除元集』に登場するのは六年版以降で、可登よりは若年と考えられる。)

四 可登 題柳

—安永五年除元集—

川からも付て笑ふは柳哉

積水

青柳や餌のなき糸に遊ぶ魚

可登

過ちてあらたむる気は柳かな

楚江

まけて勝智謀は風の柳哉

江橋

江橋を囲んで、談笑しながらの即興句であると思われるが、可登の句が一つの風格を保っていることがわかる。同じ安永五年の『除元集』に

予は居を野雲室(江橋)に隣て、久しく蘭

室の交をむすべば、この一挙に北面の微意

を述る。

寄れば撫通ればまねく柳かな

清濁坊可登

追加

東君の城下は遠し領境

不勝翁(江橋)

とあるによれば、江橋と可登との住居は隣合っていて、可登は常に北面の土の気概でいたと思われる。また門崎清氏の推定によれば、その住居は大国村の中心地である字上市にあったという。積水の安井家は字川西であるから今の距離でいえば一キロメートル位である。双方が互いに寄り合うには恰好の位置であった。

よき中の垣ゆふ暮や年一夜

自求亭可登

—安永六年除元集—

戸を明けて風の見らるゝ柳かな

可登

—安永七年除元集—

両句ともこうした生活の一片を語る句だと考えられる。

酉の冬不勝翁へ随門の句有、前書を略して茲に出す
—安永七年除元集—

宝とたのむ梅の心や花催ひ

可登 江橋

日々したしみを添る宮緑

江橋

橋ばしら流に小枝搔分て

楚江

「随門」について、江橋はまた弟子に俳号を与えることもあった。

卯雪を改(む)るに、江の字を給はりしを

よろこびて —安永七年除元集—

咲を待こころの花や菊の苗

東雲斎倚江

連(れ)が出来れば倦ぬ耕

江橋

この人物も大國の者と考えられる。五年の除元集に二句、六年に四句はいずれも「卯雪」、この七年には「倚江」で二句、八年に二句、年華集に一句であるが、八年の歳旦では、

老の身のめでたさいくへ年の花

倚江

とあるから、かなり老年での入門と考えられる。

『年華集』に「自求亭の一日千句」を賀して「見るうちに頻る夕立や一千里」の句を江橋が吟じていることからして、可登自身も入門以来、江橋の右腕となつて骨折ると共に、句作に精進したことがわかる。

逝ものは昼夜を捨(?)ず、睦月十日(文

化十一年—一八一四)は可方居士の卒哭

忌なるより、即応精舎(大森の勝源寺)に

会筵を設け、情く生前の旧交を思へば、通

家の親しきのみならで筆試るはじめより、

節季候の夕べ迄、規法嘉言は更にして、あ

るは花に座し月に酔ひ、夏の夜のうらな

くむつみ、歎憂ともに同うせしも、定めな

き世のありさまなり。されば歳々人おな

じからずと、今更詮なき袂をぬらしなが

ら 大國 可登

跡しとふ目に陽炎や百ヶ日

を発句とし、里方、莫言(兩人とも大森の人)と続く歌

仙は大森の江永堂可方の追善句集『月の寝ざめ』乾の巻

のものである。安永六年(一七七七)冬、江橋に入門し

てから三十七年を経過すれば、可登のこの地方におけ

る位置も当然といえよう。

因みに可方は諱熊谷直忠、大森にも数なき旧家で、文

化五年に東の旅に赴き、八月中旬から風寒に侵されて

臥床、九月廿八日、辞世の句「月花の夢は覺たり九月尽」

を遺して歿し、築地の善玖精舎に葬つたものの、十一月

十七日に大森の即応山勝源寺に改葬したもので「釈散

美居士」として、勝源寺の墓地に眠っている。

木の葉まで我身ひとつに時雨けり

は、その時に息里方が吟じたものである。『月の寝ざ

め』乾と坤の巻による)

さて可登には漢詩「大國十二勝」なるものが元大國小

学校(現大國公民館)に残っている。その作者は久利慎

である。昭和四十七年一月発行の『大國文化觀光誌』「ふるさと十二勝」によれば、久利村（現大田市）の松代城主の末裔で、二代（三代の誤か）久利元泰が大國村に移住し（安永六年歿という）、その後を継いだのが慎（元淑）だという。その事績については次のように記す。

元淑は幼名を茂四郎といった。海潮山勝音寺（大森町、曹洞宗龍昌寺末寺）の和尚について読書、韻文、易学を、松江侯の文学者桃白鹿に儒学を、成人となつて京都で医学者吉益東明に医学を、経典を皆川原也に学んだ篤学者である。特に在京中俳諧詩を師事研究して帰郷した。帰郷後仁術（医）を業とするかたわら寸暇に詩作。風雅を好み近郷近在の人々は元淑の徳を讃え、文学の指導も受けた。諱を慎字を元淑、号を活斎、冠巖山といい俳号を凌雲堂ともいった。

一つ一つ確認する術を持たないが、俳号を凌雲堂というのは、大國村大字、天河内の善興寺に、文化三年五月の凌雲堂可登主宰の献額が残っていることによるものと思われる。なお、この俳号凌雲堂は安永七年の『除元集』にも天明七年（一七八七）の『鳳中除元集』にも見える。

ここに久利家の墓^註について記す。本文中の番号①～⑭は見取り図の番号に相当し、見取り図中の太線は法名並記の墓であることを示す。また○は判別不能のものである。



図3. 久利家墓地

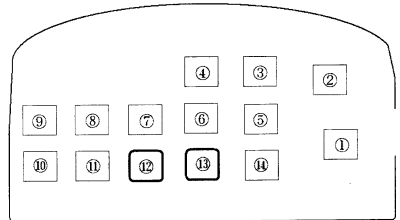


図4. 墓地見取り図

- ① 釈教観 久利原元吉 明治十年丁丑六月十九日歿
- ② ○ ○ ○ おけ ○ 明治十四年七月三十一日
- ③ ○ ○ ○ 久利元淑一女 生年二歳 明和六己丑十二月八日
- ④ 釈妙教 俗名ソノ 文化十三歳丙子四月廿六日
- ⑤ 釈玄迪 久利元淑墓 折肱館四世 文化十四年丁丑八月十九日
- ⑥ 釈義運 岡田元長墓 文化十三年丙子八月二十日
- ⑦ 釈浄春 俗名山根清兵衛 文化十四年丁丑五月
- ⑧ ○ ○ ○ 釈妙 ○ 俗名たき 文政七甲申四月十二日
- ⑨ ○ ○ ○ 久利氏 おぬい（元淑母か）安永五丙申十一月七日
- ⑨ 釈 ○ ○ （以下判別不可）

⑩ 釈妙西 久利家四世元淑九女 同五世元俊妻俗名リ

工事 天保九戊戌年

⑪ 釈玄道 久利家五代養子 俗名元俊 天保八丁酉年

十月十五日

⑫ 釈元泰 之墓（以下判別不可）

⑬ 釈○ 久利元淑妻 天明二壬寅十一月廿九日

妙苑

（元淑と連名にするつもりだったか）

⑭ 釈妙香 元淑五女 天明元辛丑四月九日

墓石⑤は「折肱館四世 久利元淑」の墓である。これについては、安永八年『除元集』の

折肱をもて館に号し事を問ふ人に

肱折て花をあんずの林かな

可登

で、証しとなる。可登は本業の医を志すかたわら、地元のために更に貢献すべく、当時世に聞こえた華岡清州の門に娘婿と定めた男を入門させた。これが⑤に並ぶ⑥の岡田元長である。華岡家所蔵『門人録』によると、文化十一年（一八一四）十月四日にて「石州銀山料（領）大国村 久利元長」の記述^注がある。不幸なことにこの元長は文化十三年八月二十日に死亡し、久利家相続の志は消えた。⑪の釈玄道俗名元俊が隣に並ぶ⑩元淑九女リエと結婚して久利家五代を継いだのだった。

五 孚可（不可）

寛政九年（一七九七）八月東都から大森に居を移した夏音舎棗里の尾花沢、象潟方面への紀行文『三度笠』（寛政十二年刊）の仮名序（梅曉舎里鶯）と真名序（棗棠園莫言）に対して、その附録集の序文に孚可は次の如く述べる。

梅曉舎はこの三度笠の発りを説（き）て筆のつたなきを述べんとせば、棗棠園は真名の序を継いで、笠に力の杖を添へんとす。我が輩は遠境近里の風土に句々をもとめて、集の終りに花をかざり、三度笠の紐をしめんと願ひしが、玉章遅来して、梓下もと々な（整）へし後なるより、附録となして、天地人にもらしたる罪を通れんとはかるも、（下略）

価涼斎 孚可

ここには、可登・春水・楚江の句は所収されているが、江橋や積水の句はない。江橋の住む大国と不可の住む大森字下市とは峠を挟んだ四キロメートル弱のところである。安永六年の『除元集』では孚可の「初雪や湯気と成ゆく牛の上」を発句とし、脇を「水仙ばかり涼しかる風」と江橋がつけ、第三句を「賀の支度庇に昆布葺足して」可登とする三吟歌仙を巻く親密さ、安永七年の『除元集』では「路次笠の着こゝろはよし春の雨」の発句を孚可がよみ、脇を江橋が「接置し木も目を覚す頃」と付ける八吟歌仙を大森の連衆と興行している。江橋に師事して、次第に大森でも頭角を顕わして来ている

ことが分かるが、これ以外の所在については、目下のところ確認の術がない。

なお、上述の莫言については、既述の文化十一年刊の『月の寝ざめ』に

花に戯れ月に嘯き、風交地(他方)に異なりし可方(熊谷直忠)のぬしや、ことし水無月東武に旅立とて「涼しさはこゝろまゝなる扇哉」とありし留別も、今は記念となるものから

手向ては花もうらめしかえり咲　大森　莫言

とあることで、大森在住の人物と知られる。(可登の発句「跡しとふ目に陽炎や百ヶ日」の第三句をつけていることについては既述した)。

なお、不可と同じく大森上市に住む帰厚という人物は、京の福商黒柳清兵衛、別号春泥舎の召波十三回忌悼集『五車反古』(天明三年刊)に

ともかくも時雨次第の高雄かな

が入集しているが、当地(石東)では、表1の通り、句数は少ない。『年華集』にも江橋の耳順を祝して

長閑さや六十一里杖いらじ

の献句をしているが、この人の安永五年(一七七六)三十三の厄年を詠む句が『除元集』に存在する以外に、羅人門でないせいか、所在確認はできない。

六 底句舎藤人

大國・大森の江橋の連衆に拮抗するように、大家・波積・上村を核とした藤人の底句舎があった。これらはいずれも天領内で、しかも山陰道(旧九号線)の線上にあった。底句舎を名乗る瀧鳴房藤人は勝氏である以外は詳細を確認することができないので、波積の山口松風の句集『楽書集』から、その活動ぶりを考証してみる。その序文に曰く、

山口松風翁、誹名南枝と言しを好友のすゝめに
より、貞徳翁のながれに遊び給ふ。藤人先生へ入門
して松風と改名するといへ共世の有様につれられ、
風雅の心は落葉となりてちることなし。老年にお
よび中風の病にふして筆に遊ぶ事叶ず。終に寛政
戊(一七九〇)仲夏下旬にしておはり給ふ。

松風の息蘭秀が父松風の句集を編集した時のものである。

この『楽書集』によると、松風は推定十九歳で伊勢参宮、二十七歳で西国巡礼、三十二歳で江戸表出向、大森を経て帰省という旅をしている。そして寛政二年(一七九〇)八月二十六日六十六歳歿であることが次の蘭秀の三句によって知られる。

仲夏二十六日おはりて

濁り江に笑ふが如し蓮の花

松風雅翁追善

五月雨も降らぬに濡るゝたもとな

語らひもしぼる涙や野辺送

この『樂書集』には続編がある。つまり蘭秀自身の句集である。次にその序文を見る。

(上略) 藤人先生へ入門せしは明和年中(一七六四〜一七七二)なり。我其道につたなくして、ついに秀ることあたはずといへ共、風雅の心緒を延反古を揃(へ)て笑ひをこふもの。

蘭秀

とし、続いて、藤人に入門したことを記す。

入門の日藤人先生より玉句を給ふ。

松風雅丈の長男、此ころ風雅の道しるべせよとの志あれば、一句を以て行衛へ(ゆくすゑ力)世に秀たまわんことを祈り、名を蘭秀とふれたまへと申送る

日々^ひに知れ道の若菜の摘加減 底句舎藤人

一河の流を汲て改名ありけるを祝して五

七五のこけらくずを以て申送る

雪どけや同じ流をむすぶ頃 九臯堂鳴鶴

只秀で秀でたまへよ梅の花 題柱舎花橋

免されて野辺をぬり出る芽立哉 大嶺亭松風

是からは扱永き日の花見かな 蘭秀

ここに名を連ねる鳴鶴・花橋・松風・蘭秀が、藤人底句舎の中核人物であるようで、

今年冬松風実父におくれし時、追善玉句を

貰う

友垣の力は落て寒さかな

冬枯の跡にかいなき落葉かな

過し世へ通しさせけり氷る鐘

松風の『樂書集』にあるもので、松風の実父の追善句である。

安永五年に江橋が『除元集』を編集した当初から、この波積の連衆は参加している。

今年江橋翁除元集に加はりて

君が代や鶴が御慶を言始め

幾はくの世話の瀬越や大三十日

今年大國不勝翁江橋先生初めて除元集を

編み給ふに加はる

屠蘇の香に梅も恥たる且かな

よきことは胸につなぐや宝舟

―蘭秀の樂書集―

この四句は安永五年版『除元集』に「波積底句舎連中」

として藤人・花橋・鳴鶴の句と共に尽く所収されている。

以下、六年も七年も同様であり、七年の除元集には、藤人・鳴鶴の両吟歌仙さへ所収している。大國・大森と波積との交流はこのように緊密であったといえる。『年華集』にも江橋の耳順を賀して次の句を送っている。

花も氣耳順ふ友そ代々の春

ちらぬ花の是は蒼そ六十回

本^{ほん}の卦へ移りはじめの今年哉

波積藤人

鳴鶴

花橋

花橋

花橋

花橋

天明六年（一七八六）元日は大雪、皆既日蝕、七月稲虫発生という異常が続き、

凶年にて酒造る事ならず
―楽書集―

今年をもしらぬは菊の盛かな
とする。山口家は酒造家であったことがわかる。また、文化十三年（一八一六）に

今年は六十一の春をむかえて

永き日になると思へば面白き

とあるから、蘭秀の誕生は宝暦六年（一七五六）かと推定される。

この蘭秀耳順の年に

瀧鳴房藤人翁追善発句会有

灯す火も見す見すきゆる寒さかな
蘭秀

とあるによつて藤人がこの年以前に歿した事が知られ、翌文化十四年に

今年三月石田思伯翁追善発句会有あり

まだまだと言間にちるやおそ桜
蘭秀

で鳴鶴が歿したことがわかる。郷原花橋は寛政十年（一七九八）二月に歿していた（『楽書集』による）。

あとがき

（亡後）思ひ出でて忍ぶ人あらむほどこそあらめ、それもまたほどなく失せて、聞き伝ふるばかりの末々はあはれとやは思ふ。さるは、跡問ふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春

の草のみぞ心あらむ人はあはれと見るべきを、はては嵐にむせびし松も千歳を待たで薪にくだかれ、古き塚はすかれて田となりぬ。

『徒然草』第三十段のことばである。安永・天明を経ること二百年をはるかにへだたり、壬申以前の戸籍を辿る術もない現在、わずかながらも確認できる一端を語っておく責務があるように思う。

大國村俳諧については『除元集』によつて推定する限り、江橋・積水・補拙・臨風・楚江・可登・春水の七人のほかに漢江・倚江（卯雪）・金葩・好古・始孝・答谷・桃溪・自見・清雨・夏木・文谷・大珠・素月・香風の十四人、計二十一名を数えるが、その所在は江橋・積水・楚江・可登・春水の五名を除いては一向に確認できない。積水・春水父子については

積水―春水―好謙―好尚―好資―好礼

とその家系は続いているが、大庄屋なる家屋は崩れて叢林の中にある。岸本江橋―楚江については門崎清氏が、その墓石を確認しておられるものの、その後は不明である。現在、大國村大佐谷に岸本の姓を名乗る家があるが、その末裔であるか否かは定め難い。

既述久利家墓地内にある①は久利原元吉の墓である。久利原元吉は明治になって、大國で剣道場を開いた。そして、天河内の満行寺の第十三代住職小笠原浄諦女曾満と結婚した。ところが明治十年六月十九日、三歳と二歳の男子を残して歿した。更に、その時に曾満は懐胎し

ていて、元吉歿後の十月廿九日に男児を出産した。戸籍簿によると、その男児、鎌吉は「久利原祐吉弟、亡父元吉三男入籍ス」として、明治十年十一月廿八日遷摩郡大國村吉川新太郎の養子となっている。二歳の男子は「久利原祐吉弟、亡父元吉二男入籍ス」として、明治十一年四月十四日安濃郡刺鹿村の岩谷清三郎の養嗣子となっている。三歳の男子祐吉については、「安濃郡鳥井村鳥井式百四拾四番地屋敷宮脇隆吉附籍」となっている。つまり幼児であるために戸籍をもたないことになり、戸籍を作るに至らずして歿している。さて、その「宮脇隆吉」とは何者か。『鳥井町史誌』^{注7}によると、

(西恵比須屋) — 文秀 — 見岷 — 九代元碩 — 十代隆吉 — 十一代信吉 — 十二代恵直とあり、その「隆吉」は医家であった。既述「ふるさと十二勝」によると、「石見八幡宮宝物、古器、棟札の目録」中に

大國十二章詩 撰者 久利慎、筆者浪華吳策 安政三年丙辰二月 寄附人宮脇元碩^{注8}。

とある。元碩はその隆吉の先代である。久利原祐吉はそこに身を寄せた。宮脇家に十二勝詩があったことと、久利家の家系には名に「元」の字を有することに注目したい。既述の如く久利元淑の家系は元俊までは迎れるが、その次と元吉とのつながりが確認できない。元俊以後に何らかの事があり、久利の下に原をつけて「久利原」と名乗ったものと思われ、その久利家の墓に元吉が葬られたものと考えられる。元吉の妻會満の墓は満行寺

墓地にあった。恐らく吉川新太郎の所業かと思われ、以後現在に至るまで、久利家の墓守は吉川家が行っている。

元吉の久利原道場は江橋・可登らの住居と推定される字上市の隣接地にあり、昭和四十七年六月三十日発行の『仁摩町誌』は

大國小学は当初一時勝音寺(廢寺)、淨行(光)寺を仮校舎に当てたが、やがて空屋(現在の大國支所地)を借用して校舎とし、明治二十八年に新校舎を現在地に建てるまで、それが続く。

とあり、また、『大國天河内教育史』^{注9}の大國小学校略年史に「島根県遷摩郡大國村大國小学校(栗原元吉宅)」とある。栗原は久利原の誤りであるが、前項に「空屋」とあるそれである。この空屋、久利原元吉氏宅が明治二十八年以降大國村役場となった。同教育史に当時の校舍略図があるが、その通りの建物で剣道場だったと思われる場所に役場の事務机が配置されていた。筆者が小学生の頃、父がその役場に勤務していたために、度々訪れてそれを記憶している。この役場も新しく建て替えられたが、今は町村合併によって、その跡形はない。ちなみに元吉が使用したと伝えられる木刀五振と遺影は吉川家に残っている。

注
1. 筆名。本名は工通忠孝。

2. B5版、上下二段組、二十六頁。図1。

3. 「ふるさと十二勝」の「文化九年、大國糶屋岸本清兵衛が、上市の大佐谷にある臨光庵の観音堂（現地蔵堂）を建立して、子安観世音菩薩を安置する。」によるか。

4. 始め「不可」、安永六年以降「孚可」。

5. 大國村上市の天神山中腹にある。

6. 梶谷光弘氏の調査による。

7. 昭和五十二年十月十日発行。

8. 石見八幡堂に奉納された額十二勝の末尾に付記されたものに「我が王父冠巖翁嘗って此作あり。寛政年中明府菅公一覽嘆賞して賦一律をなして賜る。先考元恵（見岷力）これを堅木に刻んで以って扁額と為し、土地の神廟の冒に掲げ、以って不朽を謀らんと欲するも、卒して果たさず。不肖元碩今其志を継ぎ、後世の子孫をして所感、興起を發せんと云々。安政三年春二月下浣 宮脇元碩謹誌」とある。

9. 昭和三十一年十一月一日発行。

（島根県立大学短期大学部名誉教授）

旧臘緊急入院の事態に陥り成稿断念のところ、松江高専名誉教授日野和久氏の親身も及ばぬご支援によつて、漸く日の目を見ることを得た。記して謝辞とする。

（二〇一一、一、一四日）